

お告げのマリア修道会

まごころ会

発行：お告げの
マリア修道会
2022年7月
Tel.095-846-8300

『わたしは主のはしためです。』

お言葉どおり、この身になりますように。』

「殉教者の生き方に 倣うために」



お告げのマリア修道会では、祈りの終わりに「日本のいと尊き殉教者 われらのために祈り給え」と必ず唱えます。きっかけは2008年に行われた「ペトロ岐部と187殉教者」の列福式だったと記憶しています。私たちが受け継いでいる信仰は多くの殉教者、また、迫害に耐えて信仰を守り伝えて下さった名もない信徒の皆様のおかげです。現在、日本では信仰を自由に表明し生きる事ができますが、私の熱意はどれほどだろうかと自分に問うことがあります。

7月1日は「ペトロ岐部と187殉教者」の記念日です。私たちが受け継いだものの尊さを確認し、それを生き、次の世代に伝えていくことができるようこれからも祈っていきたいと思います。下段に中央協議会のホームページから「ペトロ岐部」について抜粋して紹介しています。

まごころ会会員帰天、お祈りください

- ・ミカエル 立石 勇 84歳 山田教会
- ・テレジア 小楠ミサヲ 89歳 山田教会
- ・フランシスコ米倉次夫 92歳 山田教会
- ・マリア 赤岸シノブ 97歳 楠原教会
- ・マグダレナ 中野スエ 85歳 楠原教会

*まごころ会通信38号で紹介した市山マサ子様
の所属教会は鯛の浦ではなく紐差教会でした。
お詫びして訂正いたします。

ローマまで歩いた不屈の人

「ペトロ岐部（イエズス会司祭）」



ペトロ岐部は、1587年、豊後の国 国東半島の岐部に生まれ、少年時代は有馬のセミナリオで育てられた。後に同宿になったペトロは、1614年、宣教師とともにマカオに追放された。神と同胞に尽くしたいとの耐え難い望みに駆られ、ペトロ岐部は、1618年ころ、マカオを出奔し、インドのゴアまで行った。そこから現在のパキスタン、イラン、イラク、ヨルダンなどを横断した。ことばも風俗も知らず、砂漠の生活になれない一人旅は、生死をかけた決死行である。エルサレムに立ち寄って聖地巡礼をした後、彼がローマにたどり着いたのは、1620年であったと思われる。

マカオからローマのイエズス会の修練院に彼を受け入れないようにとの回状が届いていたが、ペトロ岐部に会ったイエズス会の長上たちは、彼の司祭叙階に便宜を計った。1620年、司祭に叙階されてすぐ、イエズス会への入会が許された。リスボンに移って誓願を立てたペトロは、帰国の途について。交易船を利用して日本に上陸しようと考えたが、マカオ、アユタヤ、マニラとも、そのとき、すでに鎖国の日本との貿易を打ち切っていた。それでもペトロ岐部は帰国を断念することなく、1630年、ついに薩摩の坊津に上陸することができた。リスボンを出帆してから、8年の歳月が流れていた。

岐部神父は長崎の山中に潜伏して活動していたが中浦ジュリアンの殉教後、岐部神父は活動を東北地方に移し、そこで数年間、活動したが、もはや潜伏は困難であることを悟り、宿主に害が及ばぬよう仙台で捕らえられることにした。

江戸に護送されて取り調べを受け、これには將軍家光が直々に立ち会ったこともあった。さまざまな拷問の末、取り調べ奉行井上筑後守の命により穴吊りにされた。それでも信仰を捨てないペトロ岐部を見た役人は、真っ赤に焼けた鉄棒を彼の腹に押しつけ、絶命させた。

